

学校名	兵庫県立龍野北高等学校
-----	-------------

## 平成 28 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール 事業計画書

### I 委託事業の内容

#### 1. 研究開発課題名

ソリューションフォーカスの視点に立つスーパー・プロフェッショナル・ケアワーカーの育成

ソリューションフォーカスの視点とは、「課題解決志向」ともいわれ、原因分析にこだわりすぎず、ニーズに対して肯定的な未来イメージを持ち、実行可能な具体的解決行動を先行させる思考法ないしはコミュニケーション手法のことで、新しいアイデアの創出や自主的・自発的行動が増える人材の育成を狙いとするものである。

#### 2. 研究の目的

本校は、平成 16 年度からの文科省指定「目指せスペシャリスト事業」を契機に、地域福祉ネットワークを確立し、学校デイサービス事業や地域介護教室その他多くの体験事業を継続させている。その結果、生徒の福祉・介護への意欲関心を喚起させ、継続的な高い国家試験合格率につながった。

こうした中、近年では福祉・介護分野における介護福祉士の人材不足や福祉施設での離職率の増加に加え、医療的ケア分野の導入による技術的不安等が大きな問題となっている。そこで、本研究では、基礎的・基本的な技術・技能の習得に加え、高度かつ応用的なものに触れさせ刺激を与えていくことで、これまで以上に、福祉や介護への強い情熱と高い誇りを有し、同時に自らの知識・技術・技能に自信を持って地域福祉に貢献できるケアワーカーを育成することを目的とした。さらには、高い理想のもと福祉施設等を起業しようとする人材を育成できればと考えた。

非常に厳しい状況の介護現場において、上記のような強い心を有したケアワーカーを育成することが、これからの福祉科教育に求められていると捉え、以下の研究を勧めていく。

#### 3. 実施期間

契約日から平成 29 年 3 月 15 日まで

#### 4. 当該年度における実施計画

##### (1) ソリューションフォーカスの視点に立つケアワーカーの育成方法の研究

①ソリューションフォーカスの土台となる力をつけるために、アクティブラーニング手法を活用して、主体的かつ協働的に課題に挑む力をつけさせる。総合福祉科だけでなく、全学科・全学年において、全校的な取組として推進する。校外研修に積極的に参加する教員を増やし、校内研究授業や公開授業を計画的に実施する。生徒の活発な活動や発表など言語活動に力を入れ、コミュニケーション能力を育成する。

②「利用者本位の介護」の視点を獲得するため、また介護技術や技能に自信を有した人材を育成するために、介護技術に関連した「生活支援技術」「介護実習」「介護過程」の3科目を連動かつ関連付けた教材開発や指導書の作成及び指導法の研究を継続していく。

③介護技術や技能の達成度を計測し、かつICF（利用者本位）の視点をどの程度獲得できたかについて測定するために、それぞれの評価法を作成した。本年度はこれに修正・改善を加え、より生徒や授業、あるいは施設の実態に即したものにするとともに、評価により表出した生徒の弱点を強化していく。

④より効果的な授業となるように、ICTを活用した授業研究を実施しているが、兵庫県立教育研修所とも連携し、Web会議の実施や自宅で携帯から介護技術動画が閲覧できるシステムを活用するとともにその効果を検証する。また、本校の電気情報システム科との連携により推進していく。

## （2）ピアスーパービジョンにより、自主性・主体性を育てる方法の研究

①「チーム」「協働」「コミュニケーション」に焦点を当て、生徒の成長につながる科行事を継続実施していく。

②本校の他学科との連携をはじめ、兵庫県、たつの市、社会福祉施設、社会福祉協議会等の官民との連携協力を今以上に深化させる。

③科行事が、生徒にどのような刺激を与え、自己有用感や自己肯定感を持つことができているのかを検証する。

④この取組は、全ての授業科目を勉強していく中で、学習の成果を発揮させる機会であると捉えている。特に、科目「コミュニケーション技術」「生活支援技術」「介護総合演習」との関連性をより意識して取り組んでいきたい。

## （3）医療的ケアの課題解決能力を高める「生活支援技術」指導法の研究

①教員免許を持たない指導員が、限られた時間数の中で、より効果的に授業展開するための教材開発や指導書の作成及び指導法の研究を継続する。

②科目「生活支援技術」の中の医療的ケア分野は、これからの介護現場において、介護福祉士が求められる技術・技能の中で、最も危険を伴う可能性があり、かつ最も自信が伴わない分野である。ゆえに、生徒の技量を高め自信を持ったケワーカーを育成していくことが必要であることから、技術・技能の到達度を測定できる評価法を確立し、かつ実態に即しながら改善を繰り返し、その効果の程を検証していく。

③またこの分野では、科目「こころとからだの理解」における基礎的基本的知識の習得を原則としており、指導・担当する教員も連動させることで、より深化した取組としたい。

## （4）高度な介護技術の習得させるための指導法の研究

①研究事項の（1）～（3）における基礎的基本的な介護技術の獲得に加え、「利用者本位の介護」の視点を獲得させるための研究を今後も推進していくが、生徒により大きな刺激を与えていくことで、より強い興味関心を喚起させ、学習への意欲を高めるために、新しい介護視点である「楽ワザ」介護の指導に触れさせる。職員もこの指導法を体得することで、自身の刺激となり、生徒により即した指導法に改善していこうとするなど、職能開発につなげていく。

②A J C C（オールジャパンコンテスト：全国福祉施設介護技術コンテスト）に基づき実施されている兵庫県介護コンテストに参加し、最優秀賞等の入賞を目指すことで、日頃の介護技術習得の成果発表の機会となり、生徒の介護に対するモチベーションを高めることにつながっている。

今年度も継続参加し、生徒の成長にどう影響をしているのかを検証していく。

③学校の教員にはない、高度で応用的な知識や技術・技能に触れさせ、学習意欲へのより強い刺激となるために、大学・短大の教授や社会福祉関連施設の理事長や施設長等の専門家を招聘する。また、介護用ロボットなど先進的かつ最新の設備を導入している施設や工場の見学を実施する。

④この取組では、科目「生活支援技術」「介護総合演習」「介護実習」との関連性が強く、外部からの強い刺激を受けることで、より高い関心意欲を持って学習に取り組ませていく。

### （５）最終年度に向けての取組

①本研究では、福祉や介護に対して自信と誇りを持ち、地域福祉のリーダーとして、離職せず（一度離職しても復職するも含む）、理想を持ち続けることができるような強い心を持ったスーパーケアワーカーを育成すること、そして理想に基づき福祉等を起業したいと思ってくれるような人材を育成していきたいと考えている。そのために、今年度はこうした人材育成ができていくかどうかを検証するために、評価法に焦点を当て取り組んできたが、次年度はこれまでの評価を形成的評価として捉え、生徒の弱点や教員の指導法改善に活かし、研究主題である職業人を育成する。

②次年度は、最終年度となるため3年間の研究成果を取りまとめるとともに、公開授業や研究授業を設定し全国に広く広報していき。また、この2年間PR不足であったため、次年度は大いに広報活動に力を入れていく。

③研究終了後も生活支援技術テキストや医療的ケアのマニュアル作りを継続して行い完成させていく。また、離職した同窓生の再就職を斡旋する人材バンク的な取組も計画している。

④ICTにおいては、次年度から兵庫県立教育研修所との連携による事業を開始するが、こうした成果や効果を検証し、研究終了後も改善・推進していく。

## 5. 実施体制

### （１）研究担当者

氏名	職名	役割分担・担当教科
井本 有二	教諭	福祉（介護福祉基礎、コミュニケーション技術、介護総合演習、こころとからだ、生活支援技術）
上田 貴美	教諭	福祉（介護福祉基礎、生活支援技術、こころとからだ）
出田 勝弘	教諭	福祉（社会福祉基礎、生活支援技術、介護総合演習、福祉情報活用）
高附 永吉	教諭	福祉（生活支援技術、介護総合演習、介護過程）
平野 絵梨香	臨時講師	福祉（コミュニケーション技術、介護福祉基礎、生活支援技術、介護総合演習、介護過程）
天野 知美	臨時講師	福祉（こころとからだ、介護福祉基礎、生活支援技術、介護総合演習）

笹山 博子	臨時実習助手	看護師（医療的ケア）
寺脇 琢真	臨時講師	福祉（社会福祉基礎、生活支援技術、介護総合演習、介護過程、福祉情報活用、こころとからだ）
木村 美由紀	教諭	看護（医療的ケア）
菅 圭介	教諭	工業（電気、ICT、アクティブラーニング）

## （２）研究推進委員会

氏 名	所属・職名	役割・専門分野等
吉原 恵子	兵庫大学 生涯福祉学部長 教授	教育社会学、社会学（ジェンダー論）
森下 美佳	たつの市健康福祉部高年福祉課主幹	地域行政
谷 尚子	たつの市社会福祉協議会総務課長	地域福祉支援体制
西川 光明	学校評議員、社会福祉法人円勝会理事長	施設福祉 施設福祉支援体制
清水 道子	県教育委員会高校教育課主任指導主事	学校教育関係
前田 達也	本校校長	委員長
栗林 秀忠	本校教頭	副委員長
矢部 宰文	本校教頭	副委員長
井本 有二	本校総合福祉科長	総括
上田 貴美	本校総合福祉科副科長	総括補佐

## （３）校内における体制図

井本有二……………科長、全研究項目を総括

上田貴美……………知識・技術習得（技能五輪・介護技術コンテスト）

出田勝弘……………共同学習・小中学校連携

高附永吉……………高齢者・障害者交流（介護コンテスト、介護技術研修会）

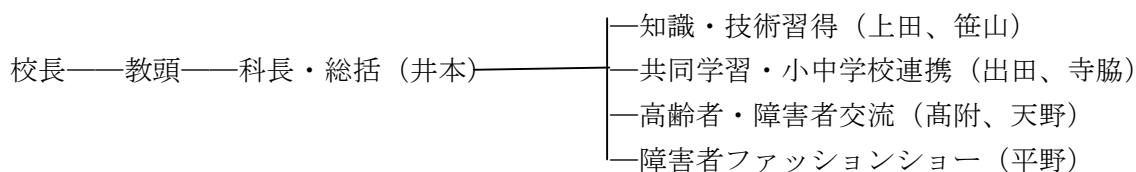
平野絵梨香……………障害者ファッションショー

天野知美……………高齢者・障害者交流

寺脇琢真……………共同学習・小中学校との連携

笹山博子……………知識・技術習得（医療的ケア）

\*工業科や看護科との連携・協力体制の構築をはかる



## 6. 研究内容別実施時期

※ 4. に記載した内容別に実施時期を記載

研究内容	実施時期											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
リユースフォーカス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ピアスーパービジョン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
医療的ケア推進	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
高度な介護技術	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

※ 実施時期は、事業計画書提出時のものであり、実際の事業着手は契約締結後とする。

## 7. この事業に関連して補助金等を受けた実績

補助金等の名称	交付者	交付額	交付年度	業務項目
なし				

## 8. 知的財産権の帰属

※ いずれかに○を付すこと。なお、1. を選択する場合、契約締結時に所定様式の提出が必要となるので留意のこと。

- ( ) 1. 知的財産権は受託者に帰属することを希望する。  
(○) 2. 知的財産権は全て文部科学省に譲渡する。

## 9. 再委託に関する事項

再委託業務の有無 有 (無)

※有の場合、別紙3に詳細を記載のこと。

## II 委託事業経費

別紙1に記載

## III 事業連絡窓口等

別紙2に記載